層雲

秋季號

荻原井泉水主宰

第三十四卷

第二・二號・昭和二十一年十一月一日（毎月四回一日）發行

昭和二十一年十一月二十五日印刷納本

層雲

第三十四卷　第二・三號　通卷第三九八・九號

六十にして立つ

戰爭がすんで一年になる。國民の大多數はいまだにボンヤリしてゐる。一部はぞうげの塔のやでノンキに構へてゐる。共に、そんなことではいけない。私は此の戰爭で、幸に生き殘つた。老骨、餘命も少い。それゆゑに、餘生をささげるといふ覺悟を以て、日本の文化の再興と創建とに獻身したいと思ふ。好き俳句を作ること其事が立派な奉公ではないか、といふ考も一應は成立つ。だが、現下の日本は、さういふ美しい理論を肯定するよりもずつと危急な段階に立つてゐる。青年時代に愛誦してゐたカントの du kannst, den du sollst といふ語が再び私の魂をうつ。「お前に出來ることなら、爲なければならない」（又「爲さねばならぬ事なら、必ず出來る」とも解せられる）――。私は老いたりと雖も、一片こゝろ〳〵の氣魄と、自分にも出來るといふ自信をもつてゐる。孔子は「三十にして立つ」と云つた。私は今「六十にして立つ」のである。ところで層雲の諸君は、層雲人としては、たゞ、層雲道にはげみ、層雲としての好い句を作つてゐてもらひたい。私はその指導の上で、少しも熱意を減じてゐるのではない。然し、私には、其他にも、私に課せられた時代的の仕事がある。此の私の氣持を信念してほしいのである。

（井泉水）

國字問題と私

荻原井泉水

今日の日本に於て、早急に解決しなければならぬ問題は有りあまつてゐる。又、早急に解決することは困難であつても、ぜひ〳〵解決せねばならぬことも亦少くない。そして、早急にすることは困難であるほどに、それが深い根ざしをもつたものであるだけ、その影響の廣さを認識した上で、非常に大きな努力と勇氣とを以て、此の解決に當らねばならぬものがこゝにある。それが國字問題がある。

國字問題の重要性に就て、今、こゝで根本的な論議を展開することはやめる。たんてきに云へば、日本を健全に、明快に再生せしめる道は、國字の改善をするより他にない。封建主義を排せよ、民主主義を普及せよなどゝ、いかに聲を大きくしたところで、本來の封建的そのものゝ象徴である漢字と、非民主的の象徴である漢字的國語が改められない限り、日本は現在のみじめな日本より一歩も進むことは出來ない。一體、國字改良運動といふものは、明治の初年、日本の科學と文化とが初めて目ざめた時に、當時の先覺者に依つていち早く提唱されたのである。ほんとうを云へば、新しい明治日本の建設と共に、國字は改定されなければならなかつたのだ。その事が爲し遂げられずして、音や訓のやゝこしい漢字と、かくの多い文字を有りがたがる氣風と制度とを進めた事が、つひにはころうきはまる傳統主義をのさばらせることとなり、はんざつそのものゝ官僚主義をいばらせることゝなり、遂には讀めない字は讀めない者が惡いといふ風なこうあつ心理が是認され、それらが一般民衆をして、譯のわからぬまゝについじうするより致し方ない者に化せしめ、遂に國を擧げての大きなはたんを生ぜしめたのだと考へられるのである。

さしあたり、今日の事を云へば、今日「天皇制是非」が問題になつてゐる。これは理論として討究することも必要だらうが、感情の問題といふこともかんきやく出來ない。そこで、實際問題としては、早い話が、私は先づ「朕」といふ漢字の抹殺からはじめればいいと思ふ。一體「朕」といふ語は、支那の語であつて、天皇みづから話し言葉にチンと仰せられるのではないが、勅語や詔書を威嚴づける爲にむづかしい漢語をならべるそれを總括する主語が此の「朕」なのである。かやうに天皇は一般の人間とは全く別の主語を用ひら

れることに依つて、人間的感情から引きはなされてゐた。それがいけないのである。「朕」といふことは、言葉としては殆ど用ひられないが、文字としては大さう權威をもつ。さういふ風に、文字が言葉を越權するといふことが、庶民の生活とは離れて生活を指導するものがあるといふことの象徴なのである。先日の陛下の御放送で、はじめて我々は「御言葉」といふものを耳にした。私達の心にはいるものは言葉としてであるべきものだ。文字から來るものにおびやかされたり、げんわくしたりすることが、一切の間違の根本なのである。戰爭中にも漢字制限が實行にうつされようとして、常用漢字約六千字が制定された。此の中には戰爭用の「爆」だの「撃」だの「轟」だのといふ、むづかしい文字は最必用文字として是認されてゐた。これらが、終戰と共に利用價値が少くなり、新しい漢字制限に依つて皆整理されようとしてゐるのは當然である。

國字改良といふ問題は明治以來、八十年ちかい歴史をもつ。學術的に云へば、殆んど問題のないことなのだが、社會的に之を實行にうつすことが出來ない事情にあつたのである。私は中學校の二年生の時、教室で一教師から、はじめて國字問題のことを聞いた。日本の漢字といふものは、學習するのに、如何にむづかしくて、それを一通り覺えるだけで、小學校と中學校の授業の大部分を使つてしまふ事、さうして大學を出たものでも滿足に漢字を使ひこなさせない事、しかも、其は科學とか文學とかいふ學術の内容ではなくて、たゞ其を書く記號にすぎないのだ。そんなつまらぬ事に苦勞をして、かんじんな事を學ぶ時間がさまたげられるやうでは、とうてい歐米の先進國と競爭することは出來ない、いや、しばらくは共に進んでも、いつかはらくごしてしまふだらう。ちようど、足に重い鐵丸をぶらさげて走りくらべをするやうなものだといふ事を聞かされた。その談ほど少年の私の心に強い火を點じたものはなかつた。私は此の問題を研究したいと考へはじめた。時は日清戰爭のあと、遼東半島還付問題で、國民がきんちやうしてゐた餘波のあつた頃、私も亦小さな愛國者の一人だつたが、とにかく日本は實力を作らなければダメだ、それには國字問題の解決がその根本だ、日本は支那にだけは勝つたが、その支那でも厄介物視してゐる漢字を日本で尊重してゐるやうでは、遂にはいつかは支那にさへも後れてしまふだらうと考へた。さうして自分こそ、日本のために此の問題の解決に當らうといふ深い決意をした。私の家は商家だつたので、一人息子たる私は、父の業をついで商人になることに、しぜんきめられてゐた。父や母は學校を好きな私が商人たることを嫌つて「屋號」を斷絶しやしないかと云ふことを大さう恐れてゐた。その氣持も解るけれども、少年の私は、一家や肉親の事よりも、一國の事は一さう重大である、その爲には、たとへ、父母の意志にそむいても、學業は最高のところまで踏まなければならないと考へた。十三、四歳の頃である。

當時、國字問題は折にふれて、諸方で論議の題になつてゐたものだつた。井上圓了博士の「漢字不可廢論」といふパンフレットが出てゐたのを、私は本屋で發見した。早速、讀んでみて、こんながんめいふれいの學者があるからいけない、と少年らしくふんがいした。讀賣新聞の月曜附録に、或人の「ローマ字を以て國語となすべき意見」といふのが出た。私は又、これをはんばくしなければなら

ないと思つた。たゞちに「假名を以て國字となすべき意見」といふ一文を書いて投書した。それが同じ月曜附錄の第一段に出された。その頃、少年世界や文庫には投書してゐたが、新聞に寄書したのはじめてだつた。又、その頃の讀賣新聞月曜附錄は島村抱月の編輯で、文壇のびのびぶたいの觀があつたのだから、中學四年生の作文めいた私の文章の載ることは異例だつたのだらう。尤も、私の論旨は、年齡相應に幼稚なもので、ローマ字で書けば「かひ」(貝)も「かい」(櫂)も共に Kai で區別がつかない、假名ならば書きわけられる便利があるといふ風な常識水平を少しもぬきでゝゐないものだつた——、今日でも、一般には此の程度の國字論者がずいぶん澤山ゐるやうである。——それは私の十六歳の時で、ちやうど、父が歿した年である。父は、私自身にではないが、母に、私には自分の好きなものを勉强さしてやれと遺言したさうで、それから私は上級學校へ行く、といふ許しを得たことになつたのである。

國字問題に對する私の熱意は、いよ〳〵心の內に高められてきたが、その頃私は、此の問題を解決するには政治手段の他はないと考へた。理論の上では、「よい」と解つてゐることが、實行の上では一歩も踏み出せないといふのは、文部省をはじめ、政府にその熱意がないからである、ほんとうに日本の將來と國民の幸福をおもふ好き政治家が無いからである。よし、自分はその政治家にならう、そうして、國字問題の解決に一生をささげよう——かう考へた。私は、中學を出ると共に、第一高等學校にはいつたが、私の選んだのは、法科(政治科)だつたのでさる。

高等學校に私は四年をつひやした。道草をくつたことでもあるが、その間に私も、少年らしい空想から生長しつゝ、だいぶんにおとなになることが出來た。私は政治家になるなどといふことは自分のがらにないことだと知つた。それから國字の問題は、學術的には一應、解答を得てゐるやうだが、果してそれが正しい解答かどうか、もう一度、これを基本的に、言語學的に檢討する必要があるのではないか、といふ風に自分で考へてきた。此の時は、日露戰爭がはじまつてゐた。其時の日本も、國家の興亡此の戰にありといふ重大時機だつた。國字問題なぞは、すつかり棚にあげられてしまつた。國民には百年先の日本を考へる心の餘裕はなく、たゞ其の當面の勝利を得ることに全力を盡さねばならなかつた。國字問題は當分、解決の見込はなくとも致し方はない。其間に、國語國字といふものゝ基本的な學的研究をなしとげておこう——私はさう考へて、法科から文科に轉籍をした。帝國大學には、「言語學科」として入學したのである。

上田萬年、高楠順次郎、金澤庄三郎、新村出、藤岡勝二の諸博士が指導してくれた。「言語」と「文字」とは其性質がまつたく別個のものであることが解つた。(當今、世間では、かなりの知識人さへも言語と文字とを混用して、文字の改定とは言語の改定であるかのやうに考へる人が少くない)。外國に於て發達した言語學は言語そのものゝ科學であるが、文字といふものに就てはさして研究は進んでゐないことを知つた。で、私は、文字の科學的研究として、世界に於ける最古のエヂプト文字、アッシリヤ文字を調べ、又、漢字の篆書以前の古文の研究にかゝつた。私の卒業論文は「文字の發生及び發達に就て」(埃及文字支那文字の比較研究)といふのであつた。此

のアルバイトは專門的なものであるが、これを通俗的に結論して云へば、文字といふものは一語（一字一字づゝ意味を有するもの）に始り、それがぜんじに「語」をはなれて「音」のものとなつて發達を遂げるが、文字が文字としての效用は、音を正しくあらはすといふことにはなく、一目し一其字（字の群）が何の語をあらはすかといふことが明かなる點にある、即ち、音をあらはす文字が一群となつて可視的一定性 visia st bility を作るといふ點にある。此の公理から考へれば、現存する文字のうちでは、ローマ字が一番好いのであつて、日本の言葉をうつすにも、カナよりも勝つてゐる點が多いのである。これは、私一人の結論ではなく、科學的の見地に立てば、しぜんと到達すべき定說なのである。

其頃、日本の社會の情勢はどうかと云ふに、日露戰爭は勝利に歸して、日本は世界五大國の一に列つた。世界何ぞおそるゝに足らんや、といふ誇りに滿ちた國民の氣持だつた。東洋の傳統を維持して西洋の文化を消化する、東西文明の交流といふところに日本のかゞやかしい位置があるといふことが、國民の信念だつた。この考から二千年來の日本的なるものは、凡て肯定される結果となつたから、萬葉集古事記以來の歷史をもつ日本の漢字といふものも、無條件に是認されて、誰一人、國字改良などといふ聲を再びあげる者はなくなつてしまつたのである。

私は、日本の國運の隆昌を喜ばないのではないが、是がこのまゝ百年二百年とつゞくであらうか。日本の過去の傳統や文化を宣揚するためには、日本在來の文字用法を踏襲することが便宜であらうが、それは日本の國民の千分の一か萬分の一の仕事の爲である。日本の將來の運命をになふところの何千萬の國民の文化標準を高め科學知識を普及する爲には、日本在來の文字がどれほどじやまになるかといふことが一般的に氣付かれねばならない。それなのに、是は到底、當分氣付かれることはむづかしい。學者が何と云ひきかしたとて、世間では耳をかたむけることはあるまい。經世家が出て、聲を大きくしたとて同じであらう。此のやうな大平逸樂的なる現在肯定の世情の中に於ては、いかに偉大なる政治家だとても、現在の情勢に革命的の一指を染めることは出來まい。譬へば、人體にがんが生じてゐたとして、其が苦痛を感ずればこそ手術をする氣になるが、何のいたみも覺えなければ、たとへ名醫の健康診斷に依つて病源を發見したとて、なか〳〵手術をする決心は出來ないのと同じであらう。國字改良といふ問題は、まづ百年間は休日だらうと、私は心の中でまつたくさじを投げてしまつたのである。

少年時代からの國字問題に對する私の情熱——それが私をして志を立てしめた動機たるところの情熱は——學業的に研究するといふ理智的な方向をとると共に、情熱としては冷却して、冷靜な科學的な興味にぎやうしたのではあるが、其の底の方では火として消えたのではなく、ひそかに青白い炎を立てゝゐたのであらう、その炎も革新的な火として大きく燃え上る機會は、當時の情勢に於ては到底望まれないと斷念されるに到つて、それでも何處かに燃えうつらないではゐられぬ私の氣持が、その當時、別に私の心をゆるがしかけてゐた俳句の新傾向運動といふものに導火せられて、その後の私は全面的に俳句の革新運動に身を投げかけて行つたのだ——かういふ風にも心理的に解釋されていゝのではないか、と自分でも思は

ないこともない。

それから三十五年である。私が、讀賣新聞に國字改良論を書いた時からは、まさに四十七年——殊ど半世紀になる。此の今日に至つて、明治大正の頃には豫想することも出來なかつた日本の新情勢が到來したのだ。國字論が新しく取上げられた。それが是か非かといふ議論ではなしに、とにかく何らかの方法に於て、實行されねばならぬ事態に立ち至つたことを國民の誰もが、うなづかざるを得なくなつたのである。

これは「天來」のことだと云つてよろしい。日本は此の戰爭ではじめに「天佑」を信じた。だが事實に於て「天譴」をかうむつたのではないか、と云つた人がある。私もさうだと思ふ。「天譴」をかうむるといふことは天がまだ日本を見捨てないことである。親は子の將來を思ふが故に、若し惡があれば之をせつかんするのだ。「天の此の人をして大事をなさしめんとするや先づ其の膚肉をうやし其の心神を苦しめ云々」と云ふではないか。日本人が日本の爲に當然爲さねばならぬ事を爲し得なかつたが故に、天が之を爲てくれたのではないか。天は理論も何もない、順序とてもない、たゞ天は一げきの下に、之をしてくれたのである。

天は一げきの下に、是が是であることを示してくれた。だが、これを實行にうつすことは國民がしなければならぬ。人間のすることとしては、理論も必要だし、順序も必要である。先づ、理論をはつきりとし、その上で適當なる順序を踏むことがかんじんである。

日本の國字として漢字を廢止すべしといふ理論は甚だかんたんに理解されよう。だが、一氣に廢することはギャップを生ずる。すべからくじよ〳〵に之を減じてゆくことが順序である。次に將來は漢字に代るべきものとして、カナがいゝかローマ字がいゝか、といふ問題となると、理論としてはたしかにローマ字が好い。だが、順序としては、カナに取りつくべきである。殊に漢字をじよ〳〵に減じてゆくといふ方針とすれば、漢字を少くする代りにカナを多くする建前であるから、ひつきやうカナ時代を一時的にでも現出することが自然である。尤も、カナ時代を作つてゆくと共に、一方ローマ字を普及せしめてゆくことも怠つてはなるまい。これに依つて、日本語を世界的に紹介する道も開けることになるし、又、世界の言葉を日本に取り入れてゆく上の便宜ともなるからである。在來、國字改良團體として「カナモジ會」があり「日本ローマ字會」があつた。前者はカナモジを主張し、後者はローマ字を主張した。兩者が主張を爭つた譯でもないが、兩々相讓らなかつたのは事實である。ところが最近、國民の國字運動聯盟が成立すると共に、此の二つの會がていけいし、又、國字問題に關心をもつあらゆる集りをきうごうして、みんなが心を併せて、此の國家的の大きな仕事を成し遂げようといふ態度に出で、現にその實行にはげんでゐることは、大さうけつこうな事だと思ふ。近き將來に於て、かならずりつぱな解決の得られる氣運が今や熟してゐると思ふ。

そこで、私自身は、今は政治的なことには全く非力であるし、又一切關係もしてゐない。又、學術的な方面には、三十餘年來遠ざかつてゐるのだから、新しい研究は何も持ち合せてゐない。だが、四十餘年前、少年の頃に私の心の中に燃えてゐた國家的の情熱は、今また新しくチロ〳〵と炎を立てはじめたやうに感ぜられる。今日の

私は、一かいの文學者であり、又、一著述家である。社會的には甚だ微力であるとは云へ、私の周圍には私の讀者をもつてゐる。又、俳句といふ方面に於ては、私の思想を思想とし、私の行動を行動してくれる人々の若干と共にある。これこそ、今日、私が此の國字運動に力をそゝぐ上で協力してくれる人達である。たとへこれは、其の範圍はせまくとも、甚だかくじつなる推進力たり得るものだと思ふ。かう云つたとて、俳句文學の運動と國字問題の運動とをゴッチャにしようと、私は考へてゐるのではない。要するに、國字運動は、此の敗戰日本を建て直して、世界的な平和なる民主日本を創造しようといふ運動なのである。此の根本理念を理解されたい。われ〳〵は層雲の俳人であると共に、日本人だといふことを自覺されたい。さうすれば、われ〳〵が層雲の俳句運動を通して、日本再建の運動に寄與してゐるといふことに、めい〳〵が大きな意義と喜びとを感じてくれると思ふ。私はさう信じてゐる。

——昭和廿一年五月廿八日

附記

今日ではたとへ、國字をローマ字にすると云つたとても、まつこうから反對する聲はきこえまい。だが、心の中では、これを不滿に或は不當だと考へる人は、かなり多いのであらう。數年前、私はローマ字國字論を或人に話したが、その人は、どうしても納得しなかつた。しかも、その人は、自由律俳句は解る人なので、私は次のやうに話したのである。

一般の人に自由律俳句を說明する時、普通に、誰にもわかりにくいのは、「型」と「リズム」との差別である。俳句といふものを、「型」に於てつかんでゐるから、型をはなれても俳句があるといふことが解らない、まして、型をはなれてこそ俳句が俳句としての生命をのび〳〵と伸ばし得るといふことは一さう解らない。國語國字の問題では日本の言葉は「いろは」の文字から成立してゐるといふ風に考へるから、ローマ字といふ外國ぶりのものを使ふと、日本の言葉をこはしてしまふだらうと考へる。そうして、ローマ字に依つて、日本の言葉が一さうハッキリとするといふ理論が解らない。これは、言葉を一綴づゝに固定さして見てゐて、言葉をその音組織として見ることを知らないからである。一例をとれば、「取る」といふ言葉は——

とらん……とりて……とる……とれども……とろう

かやうに、「と」の字が、ら……り……る……れ……ろ……とはたらくと理解してゐる。これをローマ字にすると、

tor-an…… tor-ite …tor-u……tor-edomo…… tor-o

となつて、此の言葉の幹は tor だといふことが解る。「と」が幹でないことが解る。それから「取る」の源が「手」といふ言葉だといふことはT音を共通してゐることから解る。次に、「手綱」が t-azuna「力」が t-ikara「摘む」が t-umu で、これらは皆Tを語根とした血脈の通じた言葉だといふことも解る。俳句を5 7 5といふ綴りの上で固定した風に見ないで、音脚や氣息の上に、リズムとして見てはじめて俳句の生命が解るのと同じことなのである。

麗日壇

井泉水選

船につて海汽車に乘つて山春を旅ゆく　芹田鳳車

海、裏を見せて壘が二枚干してある

影へ影が歩いて木隱れの月の光とかげ

縮刷本にうつぶいて、春電車すいてゐる

海が近くて暮れるかげが波の音する

殘つた春へ出て行つた扉が少しあいとる

松の上の木が山の松の木　渡邊さとる

花ぐもりの立止り話す妻を待ち選擧にゆく

投票すまして戻る花びらが浮いて流れてゐる

あかつき水にかげを咲いてゐる梅　田中井夢

雛だんの古びたお雛さんの表情の降り積む雪

霽れた塀の梅の枝音樂會のポスター張つてゆく

降りつもつた氣配帶ほどく音のする

もう春が破れた電車の窓から田んぼぞひの木

霰ひとしきり石屋の前ころげてゐる霰

うしろすがたの寒い滿月

水にうつる鴉もゆきぞら

山にかかつて雪がある汽車のけむり

北越日記

井泉水

夜半からの豪雨だ。明ければ信越の旅に出る豫定にはしてゐるが、どうしたものかと思ふほどの降り方だ。餘りに强い降だから、或はカラリと晴れてくれるかも知れないと、頼みをかけながら、又眠つて、朝になつてみると、まだザン〳〵と降つてゐる。もう一度、どうしたものかと考へたが、各地に日程を連絡してあることなので、一日おくらせれば凡て一日づゝ將棋倒しになる。それは各地に迷惑をかけることになるので、豫定通り出立することとする。學生時代に着た以來、三十餘年も着たことのない、雨頭巾付のレインマントを探し出させた。終戰以來、もう不必要かとおもつたゲエトルを取り出した。身支度さへととのへれば、雨なぞは大したことではない――たゞ、豪雨の爲に交通事故さへ無ければいゝのだ――家から北鎌倉の驛まで、道に沿うた小流が今日は瀧のやうだ。さうして、雨に洗はれた新綠が目がさめるやうに美しい。

×

月がくらくたつて柳のはな
春は機關車裏の柳と石炭ぬれてゐる雨
もくれん月のあかるい墓標があるの
蜂も蝶も、きのふよりけふの咲いてゐるそら
永き日波に入りてよりの蒼き波きつて航く
庭石へのつけて、くれて配給の筍一ぽん
月の殘つた春の山の製材所、である、晋
遠くで蛙鳴く二階の廊下を曲り會議室三階
島で蛙鳴く灣の滿潮

飯尾青城子

たわけほうけた蛙でうかんで風がでると
しろい雲がたたまると藪の上つきよ

松尾敦之

ひなた、箱のそこうちたたき米びつに貫ふ
部屋の隅すこし暗く七輪と野菜雪の日
そらにしろくつめたいあめのもくれん
あらしの波が江のおくまで石垣の松の木
ほちまききりりと敗けても田は鋤く
遺骨胸にかけたるも、春雨の平戸へ渡る人達
底から沸いてくる湯のあつて夜をゆさぶつて風ふく
ゆたんぽ、山のこがらし風いでゐる
鴉藁塚ほいとかはり汽車が通る
眼、この眼で見たと主張してゐる

池原魚眠洞

知らぬうちに蟬の鳴かなくなつてゐる祠が木の中
その隣も住みかはつてゐて梅雨のほれまを蝶々
工場の長い塀の、沿うて長い川の、霞のよしきり
海に星が出て春、何もなかつたことにして別れる

一〇時一〇分、新宿着。興洲、潮川宿
ぎてから、甲州にはいると、芽出し葉のみ
どりが美しい。柿の若葉のあざやかさ、桑
の若葉のやはらかさ。ぶどうの木の芽のな
よやかさ——去年までは「酒石酸」の芽で
あつたが、今年からはたしかに「ぶどう」
になるべき「ぶどうの芽」であるから嬉し
い。その間に點々と白く咲いてゐるのはり
んごの花にしては早すぎる、すもの花で
あらうか。青麥の間には、菜の花も春の名
殘をいろどつてゐる。石和あたりから、雲
は低いものゝ、雨は晴れてきた。

×

此頃、汽車に乘りながら、たゞ一つ氣持
好く思ふことは、驛名の標示が「かな」で
左書きになつたことだ。これは明治時代に
はやはりかうだつたのだが、國粹主義のが
んめい派が天下を取つた頃（小川平吉の鐵
道大臣の時）右書きに改められ、次で漢字
を大きく出すことになつたのだ。それが又
改正されたのは當然である。朝鮮を旅行し
た時、驛名が支那の漢字と日本の「かな」
と朝鮮のオンモンと三通りに書かれてゐる
のを、三國文化の不消化のままの混交とし
て淋しく感じたことだつたが、思へば現在
の日本も朝鮮と同じことで、驛名は「かな」

よいむすめとなつてひとりむすめの活けましたねこやなぎ　佐藤露江

雪あかりは月が出さうな戰災バラックの灯　木村緑平

ふきのとの味もつれ添うてからの、これの白髪よな　井上有紀男

雨は春雨、水かさの水へふりぬくとくて　一色如佛

ちよいとまたいで水が崩えてゐる　青木青華

夕べ木の影の多くなる門の内木のなかをはく　原蝦煎子

今日落ちた葉を夕べ柿の木の下をはく　井上充夫

雲のゆくへの、鴉ばかりかへつて來てなく　佐々木石々

月がおとす柿の葉のおつる音のしてゐるばん

松に雀日さしは疊までくる、といつた茶盌で

秋、包など持つて林に人の這入り林のみちゆく

秋がミルクが沸いてゐて硝子の外に見えてゐる風景

雪空もいつか月の出てきてはねつるべ

一枝は佛壇に一枝は花瓶に花の匂ひの寒あけてゐる

梅も咲きさうな空の煙管の先から煙らしてゐる

凉しく月をなくした雲の一ところの明るくて海の波

森の中の小さな池の中の小さな祠をつくつく法師

蔦の紅葉する教會堂と錄杏落葉する幼稚園と、朝

二人の子が筒袖の枯れてすすきの風寒い

家のうしろの粟畑月夜の粟の穗あけてきた

田に引く水のすんでかきつばたさくころの空

塀のうち利休の墓信長の墓塀つづく雨が春

月がかさきてみかんの配給すんだ車からころ

子の稻子とる遠くよりよびてわが聲

雞飼うて落穗拾うて遠山は雪

と漢字とローマ字と三種に書かれてゐるのだ。世界の文明國で、獨立國で、どこにこんな國があるだらうか――さう思ふと、やはり淋しい氣がする。文化的にバラ〳〵でない統一日本といふものを一日も早く建設しなければならない。

×

私の座席の向ひ側は三歳ばかりの女の子を連れた夫婦連だ。主人は工場勞務者らしい風體で、私が氣にするほどの、ぶしやうひげをはやしてゐるが、好人物らしくて、細君よりも氣をつけて子供の世話を見てゐる。「子供を連れてゐまして、おやかましいでせうが……」などゝ、顏に似合はず御世辭がいゝ。細君は、黃色のセイタの上に青いセイタを着て、男ズボンをはいてゐる。靴を通して靴下が雨の爲にぬれたので、靴下をぬいで、其素足を、私の側のシイトの上に「ごめん下さい」とも云はずに載せたものだ。見るともなく見ると、大分に足の爪がのびてゐる。實は、私も靴下がぬれたので、ぬいでゐるのだが、自分の足の爪も亦のびてゐるではないか。私ははさみを出して、自分の足の爪を切つた。

×

富士見を過ぎると、信州だ。信州にはい

生きて歸つて燒あとの雲雀ケ丘のひばりきいてる　我妻麗神明

春強い風をがらす越し砂丘の松がまばらで　和田光利

寒月に竹青し風立ちてゐる　小川都影

冴えたりお能のつづみ松のしら雪　金井三良

もらひ湯がへりの月夜うら山で狐が鳴く　伊藤雪男

壕から雨降れば顔を出して春、お客がある　井上一二

ここに落着いて月夜白い壁水の流れてゐる　杉田作郎

若葉が雨になると遙々燒出され來て机にゐる　古林巴水樓

炎がいい音のいい色のいい匂ひで朝

遠くで鴉鳴いてゐると此頃日がのびてゐる障子

雪に月のてるさまをあふむけにねてゐるか

橋にあめ籠に青菜かたにしてゆく

島の椿が赤い風ふくと陽をなくしてゐる

君のまへそくばくの花、春もほどなく逝く（悼蜻郎君）

障子にうつる日影が椿、である或る構想

松に風ふく日の神棚の下の三味線

さくらまんかい投票所傘さしてゆく

暮れ近い木のなかの明りのにはたづみ

奥の話しも漸く夜警の木の音

木の葉鰈もこのごろはとんと新圓生活

法衣には少し寒さうに風が麥畠の徑

旗日旗なく櫻ちる風は山から吹く

月が毎晩かさきて麥の芽がのびる

戰災のがれて一軒梅は枯枝にさく

何時しか春になつてゐる山羊のひげ

ると、まだ全く春だ。春いまやたけなわなりといふところだ。諏訪のあたりは、梅、櫻、桃、すもも、れんぎやうなど、百花けんをきそふといふ有樣だ。山の高みに見える花がなか〳〵好い。向うの席の女の子は、眠つてしまつた。枕にしてゐたオムツが一枚々々減つて。それだけ枕がひくくなつてゆく。

×

五時三〇、鹽尻着。松雨、迎へにきてゐてくれて、柿澤まで一里。此の道は歩き慣れてゐるので、遠いとは思はない。彼、途中で配給の酒をもらつて行く。私には、自分のうちのやうに氣易い松雨亭である。私が愛藏してゐた、雲坪の「夏山雨餘」の大幅がかけてあるので、猶更、自分のうちのやうだ。こたつで、手打そば。いかにも信州である。（四月廿五日）

×

顔を洗ひにおりると、清水に鯉がゐる。私の來た時料理しようと云つて生かしてあるのださうだが、又、此の次に來る時まで活かしておいてもらふことにした。

×

ゆうべは明けはなしたまま寢てしまつてゐた、と松雨が云ふ。彼、好い氣持に醉つ

お墓ももたないでこの下に、つくつくし　石田白毫子

うぐひすの、呼べば部屋から聲がしよう其の部屋（俊二さん）

月夜の水にも月のいつぽんぼし

朝霜まづ青い畑物に日のさし　橋本淳一

山茶花、笑うた顔が知つた顔で近よつてくる

蜜は干ものを燒いて貰うて伊豆の早春　筒井勁吉

蜜柑を二つ三つたべて伊豆の枯草の中

冬のふかい美しさが金魚二三尾水がめにゐる

火鉢にニクロム線の火の渦がふけて靜かな牡丹色す

賣春婦は室にさんしうゆの花を挿してある

さうしたおもひでにはるのゆきふるまどろすぱいぷ

れつ風、のこぎりの齒が音が丸太にくひいつてゆく

葬ふに柩の木のない世の中の早春の花は（父死す　三句）

ひとのなさけはうぐひすいろの線香のほそぼそとけむり

やつと棺にする松板しみじみと木の香早春の雲　財馬呵歩

しみじみ死に目にあへた嬉しさ言ひたべ物の湯氣により

うぐひす朝の戸引よせて出て行く

そこな水仙きつてきて佛壇の中までさす月　小谷信夫

今日はお葬ひに京へ出ます山田の麥の芽

涙はおきがいぶるなみだとじても

入り日を含む山の端の窓なる松林のかたち

梅さく山家の藏二つが海に向いてゐてくもり

青海苔干しひろげて屋根に芽ぶきたい木がとなり

雨は柳の枝のさきまで芽があるので傘

雪國の短い汽車が來るきかん車の次に乗る

て、戸をしめることを忘れたのだ。こたつはあつても、寒くはない季節になつてゐるのだ。又、此のへん、一體に純朴で、ぶつそうでないといふことでもある。その廣緣のガラス戸を明けたまま、座敷で、朝の茶を飲んでゐると、鍬をかたげた人など、門前を通りながらあいさつして通る。村の人が、「あの座敷で茶を飲んでゐるのを見るとケナルイ」と云つてゐたさうだ。ケナルイ」とはうらやましいといふ信州方言だ。「さうか、けさはケナルガラしでゐるのかな」と思ふ。この座敷は緣の下が高いので、おもてからは少し見上げるやうに見える、其前に大きな松が枝を張つてゐるのだ。松雨のひいぢいさんが伊勢參りの戻りに持つてかへつたのださうで、百五十年位にならうといふ大きな松である。

×

朝、松雨のぼだい寺の花を見たり、遊園の花を見たり、道草をくひながら、驛へ出て、一〇時四五分發、松本へ。池上サン待つてゐてくれて、一緒に入山邊の霞山莊に入る。こゝは戰爭中、秩父宮殿下の御疎開豫定地となつてゐたのだが、戰爭がすんで又、我々平民の來ることが出來るところとなつたのだ。私は、嘗てこゝへ一二度來た

多あさ池のうち靜かに舟の波にゆれ　井手逸郎

古井とざくろの木塀のうちふるさとはあたたかい

潮川に沿うたひとすぢ道が青麥の雨の霽れま

潮田に多雨のはれ上りさうな海の向うのやま

多雨はれ間の汐田には汐がま、そのそばにある道　淨心寺　惇

足袋に穴があいて二月ともなれば梅はつぼみ

霰　やこんこェプロンにポケット

とんかんとんかんぼろ寺の前　治屋雨が寒くても春である　東松八洲雄

西郷さんの下で襟卷、どこを見ても焼跡ばかり

風にばたばたする扉をしめてからの二人の寒い話

急行が通ると夜の明けた青菜きつい霜　（母病む）

枕べ寒の水を盆にしておいてしづかに灯ともり

田舍のまちは雪のちらついてゐる卵屋の卵　近木黎々火

この邊は谷も茶畠道があつて梅の咲く　（東慶寺）

牡丹の芽ぐみも暖かな句會のあとのお寺料理

池の氷が朝になると朝日へ起きる　巣山鳴雨

晴れれば月のあるぬれてゐる木々

かたくつぼみ壁に影　（訪井泉水先生）

夜が暗い坂をのぼり灯とともに居られた　（東京にて）

地べたで寶つてなんでもある

しらうめこうばいふきのとうもでまして和尚さん

發車までの、また雪がちらちらと梅もつた娘さんも來て

うぐひすぼくもきいたといふあさの木の枝雫する

女眼帶して横町から出てきたり旗のない旗日で

藥師さまの白壁ですふるさとは多ですが、二度とも秋だつた。宿のまはりに柵の木が多いので、花の頃一度來てみたい、と池上サンに談したことがある。それで、今度、案内を受けたのだ。果して、こゝの櫻は見事だ。部屋の窓の二方には、おの〳〵違つた櫻の風景があり、廊下からは又、前山にかけての櫻風景があり、風呂へ行く廻廊は櫻のトンネルであり、宿を出ると、まだ雪をもつた日本アルプス（常念、燕、槍）を背景としての櫻がパノラマ的に美しい。近頃、これほど櫻にたんのうしたことはない。夕べ、靜に暮れてゆく花にうづもれて櫻七句を作る。

×

池上サン、松本に止むを得ぬ用事があるとて歸られたので、夜は私ひとり。蛙の聲——水の音——

×

ふつと、氣まぐれに、部屋の隅にあつた碁盤をもち出して、獨り石をならべる。石を持つことは何十年ぶりだらうと思ふ。石の音はいゝものだと思ふ。と——少年、十二三歳の頃、新錢座といふところの碁の先生へ通つてゐた頃のことが思ひおこされる。その近くの或る邸に、月次の碁會があつて、いつも五六人が集つた。私の相手

夕空多山を見る妻のうしろすがたを見る　秋山秋紅蓼

山から多の日が出る庭に此の木一本　福岡灰斗

月雲をいでて山はあきらかに多なり

山の木に雪のふるさまがいまもをさないころの故里　池田詩外樓

住むに屋根をつけて霜、燒跡建てゝゐる富士のある街道を　へだてゝからすのゐる麥の芽　山本木天蓼

ゆきみち行きあひて人と人言葉かはしてゆく

背に遠い陽のゆきみち踏みゆくほどに汗ばみ

こよひもここにわが家の灯を雪ふるにもどり

鯉もらうて桶に生かして雪の夜の灯よ

雪あかりして日の暮るる雪山のひだ　原農平

家の雪圍ひ暗くてぬくくてうまやの馬

建ててゐたもう住んで靜に雪のきてゐる枯桑畠

ぬかるみ牛ひき出してあるなどきさらぎ椿の葉のつや

雪から桐が一本ハッキリとおのれを知る

皿に鰈の煮凍りけふ私の誕生日しづかに雪ふり

ホッと子にもののかげ、味噌つく音などむかしめく

軒並目ざし櫛に拔き秋の日海に照り

夕月にすすきの枯れざまも石見の國は

棹さして紅葉は湖の中

枯枝で茶が沸くほどは枯れてゐる裏の山

袖なしが似合ひ短日の垣など修理

日の出まのある空がしつとり冬木や屋根や菜園

雪のはれた培養菌がはつきり朝になつてゐる研究生で

霜どけ藪をぬけると變電所白い梅を咲かせてゐる

は、私より三つ四つ年上のお嬢サンだつた。たしか、私が白だつた。そのお嬢サンの顔は忘れてしまつたが、藤色チリメンの羽織の色をふしぎにおぼえてゐる。その邸には池があつて、今夜のやうに、蛙がコロ〳〵と鳴いてゐたこともおぼえてゐる。（四月廿六日）

×

けさは少し寢すごした。カアテンを開くと白雲のやうな花に朝日、目がまぶしい位の光。櫻三句を作る。

×

霞山莊の支配人來ての話に――櫻は道端にも、もつと澤山あつたのだが、戰爭中に村の青年團がどうしても伐れと云つて、とう〳〵伐らせられたといふ。櫻の葉の茂るために、道端の田にかげが出來る、それだけ增產をそがいするといふのが、伐れといふ理由なのだといふ。これは理窟とするにも足らない理窟であつて、戰爭中の非常識的な興奮心理はこれ一つではなく、さうした興奮を戰意昂揚と誤解してゐたところに根本的な國民の弱點があつたのである。織田信長は、出陣の前に、花の下で一さし舞をまふたといふ。それ位の大らかな氣持がなくては、何事だとて大きな仕事は成し遂

青バスおりて春めく風が公衆電話のあいてゐる扉
ちらほら梅のここが會場女もきてゐてひとりふたり

一とき夕日が溜る山懷の一軒二軒が春　木戸夢郎

獵師の鼻毛伸びてゐる犬がくさめしてゐる

月の通つた道から夜が明ける　堀英之助

大寒を滿月一つ

小鳥に南天が赤うて井戸端には米のこぼれ
つばめのむねのしろいはるをふるあめがふるさと　柳田流矢

チャブ臺の脚のぐらつく二階ぐらしの窓にもさくら
雨になつた音をごぼうの葉に聞いてからのくれがた

永い日も暮れる棕梠の木の高い花のうこん色
燒跡はたらくにつばめがきてそれから一年　大越吾亦紅

はたけの青菜をはなれないてふてふと畫になる
北からくれば松前からす山の畑は草燒き

馬の尾をほめたり牛の角をほめたり村人お正月
買出部隊らしく犬が吠える冬木の一軒一軒

時計は明治の唄を明治はよいと想ふ雪の日
灯がともると夜となり夜は雪解田の雨となる

煙出して一軒路ありて麥畑臼の音である
冬木のなかをひとりでいそぐ

手のきずの血が雪あかり
かどに松の木雪かかりその家指さしてをしふる

冬の日家々のまへ流れ行く水ここに米とぐ
犬の奴よろこび廻る外套に手をいれてたつ

日に日に雪のよごれまちの空の青空がちな

げられないのである。

×

松本に出て、池上サンに寄る。子規の菜の花のスケッチが床にかけてある。昨夜、こゝに泊つた香取秀眞氏が、これを見て歌一首を殘してゐる。私には、句を書いてくれと云はれるまゝに——

菜の花二もと繪にしてあつて四十三年

×

百瀨嘉郎、そこへ來て淺間に席がもうけてあるといふ。で、二人して淺間の鷹の湯へ行く。行きつ戻りつ春の風たいとう。一浴してはどうかといふが、こゝへ腰をおちつけてしまつては、又、一日將棋だほしになるおそれがある。だが、池のほとりの柳が青く、花は見えなくて、花びらの散つてくる畫の一とき。嘉郎が親しげに呼ぶところの千鶴子さんといふ、湯宿の女主人は、歌人らしい。三方山から女流一人、見える筈といひつゝ、遂に來らず、それも亦、春日遲々。

×

いかに春日遲々たりとも、遂にまつくらとなつて、長野に着いたのは八時。北朗をして驛に待ちぼけさせたのは氣の毒。幾度も來てゐる道とは云へ、しんの闇夜。安茂